



栄花物語の基層

中村, 康夫

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2003-03-20

(Date of Publication)

2014-10-21

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙2687

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2002687>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 3 】

氏 名 ・ (本 籍) 中 村 康 夫 (京 都 府)

博士の専攻分野の名称 博士 (文学)

学 位 記 番 号 博ろ第23号

学位授与の 要 件 学位規則第4条第2項該当

学位授与の 日 付 平成15年3月20日

【 学位論文題目 】

『栄花物語の基層』

審 査 委 員

主 査 教 授 福 長 進

教 授 林 原 純 生

助教授 田 中 康 二

助教授 樋 口 大 祐

京都女子大教授 加 納 重 文

『栄花物語』を論ずるにあたり、作品の根底を流れるものと、作品の最も主題的なものとの関わりが解明されなければならない。

本『栄花物語の基層』では、歴史意識という根底を流れるものの原型から論を開始し、主題論を経て、歴史叙述の広がりや叙述の構造の解明へと論を進める。

◆第一章 『栄花物語』の成立

『栄花物語』の記述を論じようとするとき、大きく次のような問題が浮かび上がる。

1. 『栄花物語』にとって先行する歴史書である六国史とは何であつたか

2. 『栄花物語』は歴史の何をどう書こうとしたのか

3. 『栄花物語』の時代にあつては、歴史とはどう捉えられるものであつたか

本書の第一章はこの三つの観点を中心に据えて論述する。

◇ 第一節 国史への回帰

ⅴ 回帰する思想 — 『栄花物語』前史と『栄

花物語』の記述 —

六国史の後、国史編纂が断絶して、既に五十年もの歳月が過ぎており、国史を記述する漢文の文化がもてはやされなくなった状況があるとき、なぜ『栄花物語』が書かれたのか。そして、歴史を書こうとしたとき、先行する歴史書たる六国史とは何であつたか。

このことを論究するために、『古事記』及び六国史の成立事情等に考察を加え、『栄花物語』が百五十年を超えて六国史に連接させた方法と、獲得した歴史叙述の実質とを明らかにした。

ⅴ 『栄花物語』の実録志向

『栄花物語』の冒頭は「こちよりての事をぞ記すべき」という宣言によつて始まる。この「記す」という言葉の質と重量を測定することにより、『栄花物語』が目指した歴史叙述の最も本質的な部分を明らかにする。

作品内の「記す」は冒頭のみならず、主題の展開に関わる重要な箇所の特徴的に見られ、

その全用例を検討することにより、『栄花物語』が目指したものは事実そのものを書くということであることが明確に指摘できる。また、この「記す」の意味は、『源氏物語』の用例を検討することによっても確認される。

この「記す」によって示された歴史叙述の基本姿勢は、「実録志向」というべきである。

◇ 第二節 『栄花物語』は何を書こうとしたか

▽ 『栄花物語』の記述について ― 省筆の意味するもの ―

『栄花物語』が何を書き、何を書かないとしているか。そのすべての表現を分析し、『栄花物語』の歴史叙述の本質を説明する。

『栄花物語』には、直接「書く」「書かず」としているものもあるが、これ以上は省略するといった省筆や、読者の想像に委ねる省筆など多様に存在する。

これらを分析すると、同じような内容については省筆し、新しい時代を書くことに筆を

を通して――

王朝時代に歴史を書くということは、政権の最高位にあった天皇をどう書くかということでもある。そこで、『栄花物語』正編に収められた全時代の天皇に関わる記述を、まず総論的に論じ、さらに各天皇について考察する。このことにより、『栄花物語』が書こうとした主題が明らかに抽出できるのである。

◇ 第一節 へみかどについて

▽ へみかど 造型上の問題

六国史継承の姿勢から、歴史叙述の中軸にへみかどを据えた書き方から始まり、記事が詳しくなる村上天皇においてへみかどとしての規範が押さえられるが、その村上天皇から、早くも、その権威を崩す批判が展開される。このへみかど批判は、物怪に襲われがちであつた冷泉天皇において、一般論的な言辞に変わり、円融・花山両天皇においては本格的になる。

これらの批判は藤原摂関家の待遇に密接に

関わりとところで展開されており、歴史の主役が、実質的に権力構造の最高位に立つ藤原氏へと転換していく様を、極めて自然に描き出すべく機能している。

このことは、藤原摂関家による政権の確立の後、一条天皇以下については、その記述が変貌していくことによっても明らかになる。

◇ 第二節 村上天皇について

▽ 退位志向をめぐる

三回にわたって書かれる村上天皇の退位への思いは、当時の天皇の退位する動機を点検してみても、通常によくある思いであると判断できる。しかし、自らの死期を迎えるまで退位を実現できないでいる事情については、『栄花物語』の説明は吟味しなおす必要がある。

そこで、それぞれの退位への思いが書かれている箇所と、村上天皇を取り巻く諸事情について分析してみると、藤原氏と源氏の勢力関係や、次期東宮の擁立をめぐる、やがて安和の変に繋がる、極めて微妙、かつ、重要

な問題がありつづけていることが理解される。

安子所生の三皇子を巻き込んで泥沼の政治劇を展開しかねない事態と絡めて、村上天皇の退位志向の記事は読み取るべきである。

◇ 第三節 円融天皇について

▽ 巻一における円融天皇

円融天皇は、『栄花物語』に描かれるさまざまな天皇像の中で、その変容の変節点に当たる重要な人物である。

円融天皇は、巻二から詳しく描かれ、巻一では幼さを強調する記事ばかりが目立つ。その意味を解明しておかなければならない。円融天皇は、七歳違いの兄為平親王と比較されながら描かれる。為平親王の大人っぽさは安和の変と絡むが、円融天皇の幼さは別の意味がもたされていると思われる。また、『栄花物語』には後宮の女性から「へみかど」を見る見方も存在する。その後宮の女性たちの幸福を見据えようとする視線も、この分析結果から見えてくる。

Ⅳ 『栄花物語』における円融天皇像

皇位と摂関との関係の質的変化が認められる円融天皇の時代は、通史を書こうとする『栄花物語』の歴史叙述にとって重要な時代である。

『栄花物語』においてしっかりと描かれ始める円融天皇は、立派さをいわれながらもかなり厳しく批判もされる。そこで、『小右記』等の史料も参照しながら、実像と『栄花物語』での描かれ方について考察する。

考察を進めると、『栄花物語』はかなり正確に円融天皇の実像を捉えていると判断できる。

その一方で、『栄花物語』は兼家とその女詮子について、相対的に優位に書こうとしていることが分かる。その意図が、批判的言辞になり、入内順の書き方などにも表れているのである。

Ⅴ 円融天皇周辺の人々―『御集』覚書―

『栄花物語』研究においては、物語の外側に位置するさまざまな資料群を整理する必要

がある。その資料群の中から、『円融院御集』の中の問題点一つに焦点を当て、円融天皇の周辺人物について考察を深めておきたい。

円融院御集は小さな集であるが、円融院の私的な交流関係を追いかけるためには欠かせない重要文献である。小論は「三条宮」について人物の特定を行う。後宮の人事について疑問を投げかける栄花物語の問題と直ちに繋がるわけではないが、円融院の人事交流の実体の説明が『栄花物語』研究に新たな視点を拓く可能性がある。

◇ 第四節 花山天皇について

Ⅴ 為平親王の野心

『栄花物語』における史論の観点からする天皇の位置付けは円融天皇でひとまず変節点の山を越えると思われるが、次の花山天皇については出家事件という大事件があり、その記述を大鏡との相違において捉える。このとき、為平親王に関する記述が重要である。

在位のまま出家行動に向かい、通常に皇位

委譲を果たさなかった花山天皇の出家事件は、事件発生理由について様々な推論がなされている。事件を考える重要なポイントの1つに、為平親王女入内があるので、出家事件に占めるその意味を説明した。

◇ 第五節 三条天皇について

心にもあらで：をめぐって

道長政権の安定を見た後にも、政権に関わるある種のバランス感覚が『栄花物語』の記述を支配する。天皇の問題はそのまま後宮の問題として捉えることが可能であり、御製「心にもあらで：」はいわば象徴的にそのあたりの問題を抱えているように思われる。

この和歌は、栄花物語では贈答歌であり、贈答の相手が袋草紙のいうところと異なっているなど、問題点が多々指摘できる。そういうものもある問題点を総合的に評価し直して、真実をどう捉えるべきかを示した。

◆ 第三章 『栄花物語』の達成

歴史物語の把握において、主題の展開以外

に重要なのは、史実を捉える感覚、歴史を語る観点の問題である。

◇ 第一節 『栄花物語』の和歌

和歌に託された世界

全巻に六三四首収められている和歌は、人事と行事に関連し、さらにその中を歴史事実の記述姿勢によって分類すると、巻の特徴とともに、正編・続編の本質的な違いまでが明確に指摘できるようになる。また、和歌の配置は、単なる挿話の補強にとどまるものではなく、物語の構造として評価できるものにも整えられており、最終巻の巻末に置かれた和歌は、歴史的未來への展望を含み、史書としての最も本質的な機能を持っていることを指摘しうる。

◇ 第二節 記述の広がりと内在する論理

『栄花物語』の記述の構造 — 天地・仏

神・理・自ら —

史実を物語の世界に迎えるとき、様々な定位する方法が必要になる。それは、一つには

価値観であり、作品世界にあつては、受容者と共有できる感覚と言葉において、その価値観を組み立てなければならない。

そこで、注目しなければならないのは、「天地」「仏神」「理」「自ら」の言葉である。これらの言葉が作品の内側で機能している論理を取り出し、総合的に論じた。

Ⅴ 変移の諸相

歴史をどう捉えるかは、世の中の移り変わりにおいて「今」をどう捉えるかという問題であり、『栄花物語』において世の中の「変移」をどう捉えているかを見ることは、『栄花物語』の史観を説明する上で重要である。

そこで、『栄花物語』における「変移」の全容を抽出し、『栄花物語』の史書としての本質を論じた。

Ⅵ 王朝文学の一基底——「はかなし」——

王朝女流文学作品の中で多用される「はかなし」は、『栄花物語』においても使用頻度は高いが、その意味内容を分析してみると、

歴史叙述において、特殊な展開が認められる。特に人物を捉える叙述に用いられる用例は、『栄花物語』の歴史叙述の広がりを実質を示すものとして興味深い。その実態を究明した。

論文審査等の結果の要旨

論文提出者氏名

中村 康夫

論文題目

栄花物語の基層

1 審査委員

区 分	職 名	氏 名
主 査	教 授	福 長 進
副 査	教 授	林 原 純 生
副 査	助教授	田 中 康 二
副 査	助教授	樋 口 大 祐
副 査	京都女子大学 教授	和 田 純 文

2 論文審査の結果の要旨 …………… 別紙1のとおり

3 試験の結果の要旨 …………… 別紙2のとおり

4 学位授与の可否

上記の論文審査及び試験の結果，並びに学力の確認の結果，論文提出者は博士（文学）の学位を得る資格があると認める。

論文審査の結果の要旨

氏 名	中 村 康 夫
論文題目	栄花物語の基層
要 旨	
本論文は、既発表論文14本、書き下ろしの論文1本を、第一章『『栄花物語』の成立』、第二章『『栄花物語』の主題』、第三章『『栄花物語』の達成』の三章に構成してまとめたものである。本論文の眼目は、『栄花物語』が六国史の伝統をふまえつつ、そこからいかに離陸していったかを検証することにある。『栄花物語』は、六国史の編纂が途絶えたあと、『源氏物語』の圧倒的な影響を受けて、はじめて仮名文で歴史を著した、いわゆる歴史物語の嚆矢とされる作品である。国文学における『栄花物語』研究は、どちらかといえば、仮名文の発展の歴史のなかに『栄花物語』をどのように位置づけるかという点、すなわち、物語でありながら著しく歴史に傾斜した形姿をみせる『源氏物語』と物語がはじめて歴史を正面から見据え対象化した『栄花物語』との関係性の解明に力が注がれ、六国史の歴史叙述と『栄花物語』のそれとの質的な差異を含めた、両者の連続面・非連続面についての考察は閑却されてきた。中村氏の研究は、これまでほとんど手つかずの状態にあった後者の課題に取り組み、『栄花物語』研究の新局面を切り開いていった点において高く評価されるのである。以下、中村氏の本領がいかに示されている第二章を中心に、本論文の概要ならびにそれに対する本審査委員会の評価・判断について報告することとする。 第一章、一「国史への回帰」は、国史編纂の途絶は一般に律令体制の弛緩によるとされているけれども、藤原摂関体制の確立にいたる過程で数々の政争を経験するうちに醸成された「漢才」忌避——「漢才」は体制に収まっているかぎりにおいては重用すべきものであるが、それが孕む政治に対する批判性ゆえに敬遠され忌避された——の「時代的气氛」が、「漢才」を支盤とする従前の修史事業の継続を阻碍する要因となっていたことを指摘するなど、新見に満ちている。また、『栄花物語』の地の文に見える「記す」という表現に着目して、確実な資料に基づいて歴史を書きとめようとする「実録意識」を剔抉し、『栄花物語』の編纂物的性格を明らかにしている。 第一章、二『『栄花物語』は何を書こうとしたか』は、『栄花物語』の省筆の草子地に考察を加え、繰り返される同種の出来事・儀式を記すに際して叙述が冗漫になることを避けるためのものであることをおさえたうえで、読者の知識を前提にした、読者の〈読み〉を	
主査記載 氏名・印	稲 長 進

促す〈装置〉と捉え、帝鑑とすべく編纂された六国史との違いを鮮やかに照らし出している。他方、同種の出来事・儀式でありながら詳述される記事にも注目し、それが新例であることを読者に理解させる配慮とみて、『栄花物語』の儀式書としての性格を認めている。

さて、第二章は、一「〈みかど〉について」、二「村上天皇について」、三「円融天皇について」、四「花山天皇について」、五「三条天皇について」の五部構成となっているが、それらの総論が、一「〈みかど〉について」である。残りの諸論考はそれぞれの帝の造型のありようを本文に密着しながら精緻に描出したものと捉えられる。したがって、一の論考についてやや詳しく説明する。

『栄花物語』の正編は、村上天皇の御世のことから書き始められ、藤原道長の薨逝で終わる。村上天皇から始まり、後一条天皇の御世のことまでを書き記して擲筆するのであれば、首尾呼応した歴史叙述とみなせるのであるが、実は如上のように、そのようにはなっていないのである。そのことをはじめて問題としてうちたて、村上天皇の造型に名残を見せる六国史的天皇造型が「解きほぐされ」て、〈師輔一兼家一道長〉という九条流の発展史が紡ぎ出されていく様相を、天皇と実権勢力とが「有機的關係」をつくる後宮の描き方に注目して村上天皇から後一条天皇に至る天皇造型の変質過程を追跡することによって明らかにしている。六国史的天皇造型を解体し、九条流の発展史あるいは道長賛美の歴史を作りあげたことを『栄花物語』の独自の達成として評価している。これは『栄花物語』研究史上、画期的な論文として今日においても絶えず反芻されている。

さて、第三章で注目すべき論は、二「記述の広がり」と内在する論理である。『栄花物語』は、先に述べたように、九条流の発展史あるいは道長賛美の歴史であったけれども、道長の繁栄の陰で沈淪を余儀なくされた敗者の哀切な物語も取り込んでいる。かかる物語を導入するに際して九条流の発展史あるいは道長賛美の歴史と折り合いをつけたために仕組まれたさまざまな論理をあぶりだしている。

如上のように、本論文は『栄花物語』の歴史叙述の内質を、細緻な読みの積み重ねによってさまざまな角度から照らし出している。斬新な論点や数多の新見が示され、『栄花物語』研究を格段に前進させている。また、二度にわたる『袋草子』の註釈作業によって培われた和歌に関する豊かな知見に基づく手堅い考証が『栄花物語』の新たな読みを見事に産出してもいる。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は論文提出者中村康夫氏が博士（文学）の学位を授与されるに足ると認めた。

試験の結果の要旨

氏 名	中 村 康 夫		
試験科目	専門科目	日本伝統文学論	
		日本古典文学受容論	
		和歌文学論	
		日本説話伝承論	
		平安時代文学論	
判 定	合 格 ・ 不 合 格		
要 旨			
本審査委員会は、中村康夫氏の提出した『栄花物語の基層』について、その基礎および背景をなす専門科目の口述試験を行い、下記の結果を得た。 実施日 平成15年2月13日 専門科目「日本伝統文学論」 本論文が六つの官撰国史を一括りにして、それぞれの歴史叙述の個性にはほとんど頼着しないで『栄花物語』との連続・非連続面について考察を重ねている点について問うたところ、『栄花物語』との比較の対象としてとりわけ重視しているのは『日本三代実録』であることを述べ、その序文をふまえながら両者の関係について説述し、『栄花物語』の成立の地盤に関する新見解を示した。また、本論文においては『源氏物語』の『栄花物語』に対する影響についての考察が欠けていることを指摘したところ、『源氏物語』がのっけから桐壺天皇の後宮を描き、天皇と実権勢力とがせめぎ合う「場」として後宮を発見したことが、『栄花物語』が後宮を叙述の主対象として見据えて六国史的天皇造型を「解きほぐし」、九条流発展史を紡ぎ出していくうえで無視しえぬ影響を与えたことを、明快かつ説得的に述べた。			
主査記載 氏名・印		稿 長 連	

専門科目「日本古典文学受容論」

本論文のなかで言及されている与謝野晶子の古典受容、特に『栄花物語』の理解について質問したところ、まず明治30・40年ごろの『栄花物語』研究の実態を述べ、次いで晶子は和田英松・佐藤球両氏による『栄花物語詳解』に啓発されるところが大きかったこと、晶子の詠歌には『栄花物語』の内容をふまえたものがあること、大正14～15年に出版された『日本古典全集 栄花物語上・下』に付された晶子の解題は今日においてもなお研究史的意義を消失していないこと、明治45年から大正2年にかけて出された『新訳源氏物語』は晶子の『栄花物語』理解に深く根ざすこと等を丁寧に説明した。

専門科目「和歌文学論」

第三章、一「『栄花物語』の和歌」で論述されている内容に即して、『栄花物語』における和歌の省筆がどのような理由によるのかを尋ねたところ、『栄花物語』が依拠した原資料の不備によるもの、省筆によって読み手に想像を促すためのもの、冗長を避けるためのもの等があることを、それぞれの具体例をあげながら説明した。また、和歌の省筆のありようから『栄花物語』の正編と続編の編纂の違いが浮き彫りになるという注目すべき回答を得た。

専門科目「日本説話伝承論」

第三章、二「記述の広がり」と内在する論理」の内容に関連して、「はかなし」という心性によって政治的敗者のみならず勝者をもともに取押えていく、『栄花物語』にみられる歴史の捉え方がどのように醸成されてきたかについて質問した。作品を生み出した時代との相関や心性の表現史からの的確な回答が得られた。

専門科目「平安時代文学論」

第二章、五「三条天皇について」において展開されている、三条天皇御製「ころにもあらでうきよにながらへばこひしかるべきよはの月かな」が『栄花物語』のいうところの冬の歌ではなく、秋の歌であることを明らかにする論証に疑義を提出したところ、自説を説得的に再説し、論証の手堅さを示した。また、同章、三「円融天皇について」のなかで『円融天皇御集』に基づいてなされた円融天皇周辺の人々についての考察が、「三条宮」に誰を当てるべきかの議論に終始していて、円融天皇像を周辺の人々から明らかにするという論の進め方と重ならないことを指摘したところ、再度、他資料を駆使して考え直す旨の前向きの回答を得た。